

2002（平成14）年度東海地区協議会 第7回相互協力実務担当者研修会報告

日 程：8月1日（木）～8月2日（金）

場 所：第1日目 中京大学 山手ホール、コンピュータ演習室

第2日目 南山学園研修センター

テーマ：これからの図書館員のための情報リテラシー

参加者：32大学 1機関 56名参加（講師及報告者を含む）

【第1日】10時～20時30分

I．開会挨拶 愛知大学豊橋図書館長 保住敏彦

会場校挨拶 中京大学図書館長 長谷川端

II．ビデオ上映「新・図書館の達人 第1巻」

III．講演「情報リテラシー教育と新しい図書館員像：『新・図書館の達人』から『図書館利用教育ガイドライン』まで」

早稲田大学図書館 仁上幸治

* 講演記録参照

IV．講演「情報リテラシー教育実践講座：学生の心をつかむ魅力ある話し方」

名古屋経済大学助教授 水口美知子

* 講演記録参照

V．演習「情報リテラシー教育実習：『演習問題集』を使ったオリエンテーションの進め方」

日外アソシエーツ株式会社 青木竜馬 広瀬容子

日外アソシエーツが提供しているデータベース「NICHIGAI/WEB サービス」を使って、検索や利用者オリエンテーションの進め方などの演習を行った。また、検索結果とOPACとのリンクの説明、ブロードバンドを使ったデータベースの紹介などもあった。

質疑応答では、OPACとのリンクについての質問がなされ、ISSNで検索をかけること、一部のパッケージでは出来ないこと、リンクは無料であることなどの説明があった。

VI．情報交換会 中京大学から南山学園研修センターに移動し、参加者による交流が行われた。

【第2日】9時～16時

I. 分科会：グループ討議

1. A 分科会 図書館員のための IT 講座：情報技術のスキルアップをめざして
 2. B 分科会 レファレンス：インタビュープロセスとレファレンス基本ツールについて
 3. C 分科会 利用者教育：参加者のモチベーションを高めるために
- * 各分科会記録参照

II. 質疑応答

前日の講演・演習への質問票をもとに、講演者からの回答・補足説明、質疑応答が行われた。

・著作権に関して、特にインターネットや電子資料について、どう考えるか

(講演者) 図書館が利用者の利用を制限するような印象を与えるのは良くありません。図書館はあくまで利用を促進する立場でなければならないはずです。もともと著作権というのは、著作者側の権利を守るという力と先人の遺産を共有して利用しようという力の間の綱引きの一時的な妥協の産物であって、まだ非常に流動的なものです。そういう前提の上に立って、利用上の倫理や、引用のルールがある、ということを示す必要はあります。このあたりの内容は『ガイドライン』の目標に明記されているとおりです。著作権関連のやってはいけないことなどがはっきりした時点で、図書館として制限するなどの措置を取ればよいのではないかと思います。

・学生は課題のための資料を探しに図書館へ来る。蔵書検索をすること自体が学習・研究だと思うが、レポート、論文作成支援のレファレンスはどこまでやればいいのか？

(講演者) 「新・図書館の達人」第6巻を参考にして、10のステップを意識して指導の場面に応じて、できる範囲で指導サービスを展開していけばいいのではないのでしょうか。「来るものは拒まず」的な待ちの姿勢では図書館が大学教育に貢献していると認めてもらえない。そうなると合理化・人減らしの草刈場になって派遣と外部委託が増える。専門性の最後の砦であるレファレンスもただの複写取り寄せ受付窓口でしかなくなるでしょう。

・これからの図書館員にはより広くより深い情報リテラシーが必要なことは講演を通して理解できた。しかし、整理法や表現法までは現実的に無理ではないか？情報関係の授業やゼミ、センターの教員に任せるのが望ましいのでは？

(講演者) 確かに『ガイドライン』では全面展開が必要であると謳っているが、誰がやるべきであるかまではあえて言及していません。読者として想定しているのは、図書館員だけでなく、教員、理事、各種団体、教育機関、マスコミ、親などで、要するに広い意味で「関係者」がそれぞれの持ち場で出来ることをどんどんやってみようじゃないかというスタンスです。大学の場合それぞれの実情に合わせて目標と方法手段を設定して、部分的段階的にやっていけばよいのではないかという考え方です。大学を挙げて情報リテラシー教育を実施しているところならそれでいいかもしれませんが、そうでない大学では、図書館員の出来ないことは教員がやればよい、と言うような他人任せの姿勢では何も変わりません。図書館側から関係者を巻き込んでいく積極的な戦略が大事です。

- ・図書館員が情報リテラシー習得支援までやるのは現在の勤務状況では厳しいが。

(講演者)確かに現場はどこも大変ですね。直接対面指導だけを思い浮かべると、忙しいから限度があるというブレーキがかかりますね。ここが工夫のしどころです。例えばホームページ上にデータを載せて、オンライン指導するなど、忙しくても一度アップしてしまえば自習してもらえるわけで、手間は増えませんね。方法手段はぎりぎり限界まで工夫することが大切ではないでしょうか。

- ・名は体を表す。次世代型司書にふさわしい新しいネーミングは？

(講演者)図書館大会のテーマでは「めざせ、情報インストラクター！」という標語を掲げましたが、どうでしょうか？職業、職種、資格を表す言葉は重要です。みなさんもいい言葉をご提案ください。

- ・企画広報研究分科会に参加したい。月例会員、ML 会員の数は？

(講演者)今期は月例会員 11 名。ML 会員は近日公募予定です。仁上宛にメールをくださればご案内します。今期のテーマは、パスファインダーです。主題別情報探索案内リーフレットと言えるもので、手間がかからず、簡単に使えて、レファレンスにも活用できる便利なものです。それをただ自分の図書館で配布するだけじゃなくて、私大図協のレベルで共同開発共同利用しようというのがパスファインダーバンク構想です。

(参加者)パスファインダーを活用している。主題文献案内、情報探索資源として利用者の道しるべになっている。

(参加者)亜細亜大学など進んでいる大学の例を学ぶとよい。他の大学でできて、できないことはないと思う。しかし、これは最大の課題である。関係機関への働きかけの仕方については、意見交換が必要である。

- ・ガイダンス等の資料をホームページ上に載せることについて、その PR 方法はどうしたら良いか？

(講演者)自習してもらおうという方向ですね。ガイダンスは 1 年生全員を必修にするのが一番良いはずです。ただ、問題は参加率です。いくら PR しても 100 パーセントにはなりませんね？自由参加方式だとせいぜい 5 パーセントか良くて 10 パーセントくらいですね。これでは 90 パーセント以上はガイダンスを受けないままですから、図書館はいつまで経っても「初歩的質問攻め」から逃れられませんね。

(参加者)1 年生全員にガイダンスを実施している大学もある。

(講演者)まずは全員強制参加を目指す。それができないならホームページに載せて自習してもらおう、という目標の優先順位が必要ではないでしょうか。詳細は『図書館広報実践ハンドブック - 広報戦の全面展開を目指して - 』をご一読ください。

- ・MAGAZINEPLUS の検索結果と自館パッケージとのリンクについて伺いたい。

(日外アソシエーツ)リンクできるパッケージとそうでないものがあるので、個別に相談ということになる。日外アソシエーツはあくまでも素材を扱う役割であって、それを使いこなすのは図書館員である。今後もいろいろ意見を頂戴したい。

質疑応答の最後に講演者から挨拶があった。

(講演者) 東海地区の図書館員のみなさんは非常に熱心ですね。こちら也大いに勉強になりました。良い機会をいただきとても感謝しています。せっかくこういう情報交換の場ができたわけですから、ぜひその成果を形にしてほしいと思います。研修会の仕組みについても今後、ネットワークの活用など新しい形を考えていきましょう。どうもありがとうございました。

III. 分科会報告、質疑応答

午前中に行われたグループ討議の報告があり、それについての質疑応答が行われた。

・サーチエンジンの検索結果の信憑性について

(参加者) 医科学系大学では命に関わることでもあるので、インターネットはあくまで単なる足がかりである、という意識を植え付けるようにしている。

その後、参加者にインターネットの情報の取り扱いについて、積極的に利用者教育している館があるかどうか挙手を求めたが、特にはなく、ガイダンスで少し触れる程度のところがほとんどであった。

・インターネットへのアクセス制限について

(参加者) フィルターやファイアウォールなど、いろいろな種類のソフトがあるので、それらを組み合わせると良い。

(参加者) フィルタリングソフトも有効だが、高額なことが多い。セキュリティーポリシーをしっかり持つことが大切だと思う。

・自館ホームページの作成・メンテナンスを誰が担当しているか。職員が担当する場合、外注する場合のメリット、デメリットは

(参加者) システム担当者が一人でやっている。

(参加者) ホームページの担当者の他に、目録担当者も該当する部分を作っていて、それぞれの独自性が出ている。外注しないメリットとしては、データアップの頻度が高いので、即時性がある。図書館の意図が伝わりやすい、などがある。

IV. 相互協力委員会活動報告

相互協力委員会委員長(愛知大学名古屋図書館 長坂功)より2001年から2002年度の委員会の活動について説明と報告があった。又、先に行った「OPAC 横断検索/相互貸借物流に関するアンケート調査」の集計結果の中間報告があった。大学図書館の一般開放状況が、東海地区協議会のホームページ上から見られるようになる旨、報告があった。

最後に、単館だけで成り立ってゆくのは難しい現在、更なる相互協力の大切さを伝えていきたい、との挨拶があった。